

博士学位論文

(内容の要旨及び論文審査の結果の要旨)

ZHANG YEQIAN

氏名 張 葉茜
学位の種類 博士 (工学)
学位記番号 博 甲 第 59 号
学位授与 平成 30 年 3 月 23 日
学位授与条件 学位規定第 3 条第 3 項該当
論文題目 中国・徽州地方の祠堂建築の形成過程と空間構成に関する研究 — 歙県地域を中心として —
論文審査委員 (主査) 教授 杉野 丞¹
(審査委員) 教授 建部 謙治¹ 教授 中井 孝幸¹ 教授 溝口 正人²

論文内容の要旨

中国・徽州地方の祠堂建築の形成過程と空間構成に関する研究 — 歙県地域を中心として —

本論文は、徽州地方の歙県を中心とする地域の「祠堂建築」について、歴史的な形成過程と建築的な空間構成を明らかにしたものである。この地域の祠堂の歴史的な転換期となる明代中期(1446-1582 頃)を中心とし、宋代から明代中期までの祠堂の系譜と時代性、分布と地域性について検討し、国家の礼制改革、宗族の組織化、商人の活動、宗族村落との関連性について論じた。さらに、明代中期以降について、宗族村落の発展に伴って増加した「宗祠建築」の分化、発展、系譜を明らかにし、明・清時代の宗祠遺構の分類と建築的な特質について論じており、全体は六章からなる。

第一章では、本研究の背景、研究目的、研究方法、論文構成を述べている。徽州地方の祠堂建築の研究について、歴史学、民俗学、建築学など各分野の見解を取り上げ、建築学における祠堂建築の課題を指摘し、宗族の体系的な研究と遺構の系統的な研究の必要性を論じている。

第二章では、徽州地方の祠堂建築について歴史的背景を検討している。

(1) 徽州地方の地方志について、明代の弘治十五年(1502)と嘉靖四十五年(1566)の『徽州府志』に基づいて、祠堂建築に関する記載について巻数、分野とその内容を検討し、歙県において地縁祭祀の祠廟、血縁祭祀の墓祠と宗祠が存在したことを明らかにした。

(2) 徽州地方の族譜について、歙県地域の族譜から明代中期以降の宗族の組織化と宗族の発展に伴って、宗族、支派、さらに近隣地域の同族集団において族譜の編纂、宗祠の建設が行われたことを明らかにした。

(3) 徽州地方の宗族社会について、移民と商人、宗族と村落、祠堂建築の三つの視点から検討し、次の点を明らかにした。移民と商人は、漢代から唐・宋・元代に戦乱を避けて移住した人々が耕地の不足に迫られ、長江流域において商業活動を始め、徽州商人として成功し繁栄を誇った。また、宗族と村落では、同族の人々が宗族村落を形成すると、村落内部では大宗・小宗(本家・分家)による宗族、支派、家族等の同族集団が生み出された。祠堂建築は、地縁祭祀の場合、当地宗族の始祖の祭祀から始まる祠廟が建てられ、血縁祭祀の場合、墓祭と廟祭二つの祭祀形式があり、墓祭では仏教、道教の影響を受けた祭祀が行われ、廟祭では明代中期以降の宗族の組織化により、家族による高祖以下四代を祀る小宗主義的な祭祀から、宗族構成員が多く集まって始祖を祀る大宗主義的な祭祀へ変化し、祠堂建築にも影響を及ぼしたことを指摘した。

第三章では、宋代から明代中期までの歙県の祠堂建築の分類と時代区分、分布と発展などの歴史的な形成過程を明らかにし、中でも、地縁祭祀と血縁祭祀の関連性を検討している。

(1) 祠堂建築の分類と区分は、地方志の分野により、地縁祭祀の「祠廟」、血縁祭祀の「墓祠」と「宗祠」の三種類に分けられる。祠廟は、漢代から功績のあった人物を祀る専祠として始まり、「廟」、「行祠」は、唐・宋時代以降、

¹ 愛知工業大学 工学部 建築学科 (豊田市)

² 名古屋市立大学 (名古屋市)

朝廷の賜額、賜号を受けたものであり、「祠」、「生祠」は、専祠に相当するものであった。墓祠は、仏・道教の影響を受け、宋・元代に「墳寺」、「墳庵」を建てたが、明代以降その影響は薄れ、血縁による祖先祭祀が主に行われた。宗祠は、宋代には一祖先を祀る小宗主義的な「庵」であったが、元代末以降、複数の先祖を合祀した「堂」、同族祭祀による大宗主義的な「祠堂」が現れ、さらに、明代嘉靖十五年(1536)の礼制改革により、本格的な「宗祠」が建てられるようになったことを明らかにした。

(2) 祠堂建築の事例分布は、明代中期には主に城の周辺に集中していたが、徽州商人が河川の水上交通により活動を広げると、流域の村落では本山の「廟」から「行祠」へと分化した。さらに、分家により農村部に新たな村落が生まれると、祠堂建築が急激に増加したことを指摘した。

(3) 地縁祭祀と血縁祭祀については、明代中期以降、朝廷の礼制改革により宗族の組織化が広く進み、地縁祭祀の祠廟が本山の「廟」から「行祠」へ分化し、宗族村落の発展に伴って血縁祭祀の「宗祠」の建設が積極的に行われたことを明らかにした。

第四章では、歙県の宗族村落と祠堂建築について、族譜から潭渡黄氏、葉村洪氏、許村許氏の事例を取り上げ、明代中期以降の宗族村落と宗祠建築の階層性について検討している。

(1) 宗族村落は、同族結合と異姓雑居の二つの形態があり、山間部には同族結合の村落、河川流域には異姓雑居の村落が生まれ、いずれも始祖や始遷祖を祀る「宗祠」、支派祖を祀る「支祠」、族内の特定人物を祀る「専祠」などの宗祠建築が建てられたことを明らかにした。

(2) 宗祠建築は、明代中期から清代にかけて個人を祀るものから、宗族の組織化と共に同族の祖先を祀る宗祠や支祠が生み出された。宗祠の建築形態は、いずれも中軸線に対して左右対称の配置とし、奥行方向に沿って門、堂、寝と庭とを一つユニットとして、縦一列に並べる「進」という空間単位を造り、建物全体の空間秩序を重んじて奥行の「進」、間口の「間」の組み合わせにより、平面形式を定型化させたことを明らかにした。

(3) 宗祠の発展と分化は、明代中期に入ると宗族の相続と分家、祭祀の変化による支派への分化、さらに、周辺への宗族村落の分散により、近隣地域に複数の宗族村落が形成された。それにより、「統宗祠」、「宗祠」、「総支祠」、「分支祠」、「家祠」が生み出され、これらの宗祠建築は宗祠系、支祠系、家祠系、専祠系の四系統が生み出されたことを明らかにした。

第五章では、宗祠遺構の平面形式、平面構成、構造形式を比較検討することで、宗祠建築の空間構成の特質を明らかにしている。

(1) 平面形式は、門、堂、寝と庭を一つユニットとして縦一列に並べる進という空間単位とし、一進から五進型の

構成を生み出し、三進型を基本タイプとし、小型の一進三間から大型の五進七間までの多様な平面形式を成立させ、宗祠系では三進五間、次いで支祠系、家祠系では三進三間や二進三間が多く採用され、宗祠の類型ごとに平面形式が定着するようになった。

(2) 平面構成は、宗祠建築を構成する門、堂、寝の主要建物の機能が共通し、規模の大小があるもの間取りの構成に共通性が認められた。門、堂、寝の正面・背面柱列・端間では「減柱式」、「移柱式」を用いることで、各建物と中庭の間に連続性の強い空間を生み出した。

(3) 構造形式は、門、堂、寝の身舎・庇からなる構造システム、柱間に虹梁・貫などの横架材を渡す架構形式を成立させた。門は、「庇-庇」による「五架三柱式」、「七架三柱式」の対称な架構、「門墻-庇」による「三架二柱式」、「四架二柱式」の非対称な架構が見られ、堂と寝は、いずれも「庇-身舎-庇」による「八架四柱式」とするものが一般的であった。また、分類別にみると宗祠系に比べ、支祠系の場合は多様な構造形式が採られ、家祠系の場合はいずれも単純な構造形式が用いられていることが分かる。各建物の中央間では抬梁式架構を基本とし、脇間では穿闕式架構、或は複合式架構を用い、天井の上部に草架を架けている。組物は、明代では装飾化された小型の二手先、三手先斗栱、清代に入ると持出梁が用いられるようになった。

第六章では、各章で得られた研究成果と意義を総括して結論とした。

論文審査結果の要旨

本論文は、中国・徽州地方の歙県を中心とする地域の「祠堂建築」について、歴史的な「形成過程」と建築的な「空間構成」を明らかにしたものである。前半では宋代から明代中期の祠堂の系譜と時代性、分布と地域性について検討し、国家の礼制改革、宗族の組織化、徽州商人の活動、宗族村落との関わりを論じ、後半では明・清代の宗族村落の発展と宗祠遺構の分化、発展、系譜、さらに平面、構造を検討し、宗祠建築の建築的な特質を論じており、以下の六章において研究成果を纏めている。

第一章では、本研究の背景、研究目的、研究方法、論文構成を述べている。中でも、徽州地方の祠堂建築の研究における宗族の体系的な研究と遺構の系統的な研究の必要性を論じている。

第二章では、徽州地方の祠堂建築について歴史的背景を明らかにしている。

先ず、地方志について、明代の『徽州府志』に基づき、祠堂建築に関する記録の内容を分析し、歙県において地縁祭祀の「祠廟」、血縁祭祀の「墓祠」と「宗祠」が存在したことを明らかにしている。次に、族譜について、歙県の

族譜から宗族の組織化と発展に伴ない、近隣の同族集団において族譜の編纂、「宗祠」の建設が行われたことを明らかにしている。さらに、宗族社会について、移民と商人、宗族と村落、祠堂建築の三点を検証し、移民と商人では、漢代から唐・宋・元代に戦乱を避けて移住した人々が耕地不足に迫られ、長江流域で商業活動を始め、徽州商人として成功し繁栄を誇り、宗族と村落では、宗族村落が形成されると、本家と分家による宗族、支派、家族等の同族集団が生み出され、祠堂建築では宗族の始祖の「祠廟」が建てられ、さらに「墓祠」、「宗祠」が建てられた点を指摘している。

第三章では、宋代から明代中期までの歙県の祠堂建築について、分類と時代、分布と発展など、歴史的な形成過程を明らかにしている。

まず、祠堂建築は「祠廟」、「墓祠」、「宗祠」の三種類に分けられ、「祠廟」は漢代から功績のあった人物を祀ったもの、その中に朝廷の賜額を受けた「廟」、「行祠」、専祠に相当する「祠」、「生祠」などがあった。「墓祠」は仏教や道教の影響を受け、その中に「墳寺」、「墳庵」とされたものがある。「宗祠」は宗族を祀ったものであり、その中に一人の祖先を祀った「庵」、複数の先祖を合祀した「堂」、同族を祀った「祠堂」などがあり、明代の礼制改革により、本格的な「宗祠」が建設されたことを明らかにしている。次に、祠堂建築の分布は、明代中期に徽州商人が河川の水上交通により活動を広げると、流域の村落では「廟」から「行祠」へ分化したことを示している。さらに、本家から分家して新たな村落が生まれたことで祠堂建築が急増したことを指摘している。

第四章では、歙県の宗族村落と祠堂建築について、族譜から潭渡黄氏、葉村洪氏、許村許氏を取り上げ、明代中期以降の宗族村落と宗祠建築における階層性を明らかにしている。

まず、宗族村落には同族結合と異姓雑居の形態があり、いずれも始祖や始遷祖を祀る「宗祠」、支派祖を祀る「支祠」、族内の人物を祀る「専祠」などを建てたことを明らかにしている。次に、宗祠建築は、建物の空間秩序を重んじ、中軸線に対して奥方向に「庭」と「門」、「堂」、「寝」を一つユニットとし、縦一列に並べる「進」という空間単位を造り、奥行の「進」、間口の「間」を組み合わせによる平面形式を成立させたことを明らかにしている。さらに、宗祠の発展と分化は、宗族の相続と分家により、宗族村落が周辺に分散すると村落の中に「統宗祠」、「宗祠」、「総支祠」、「分支祠」、「家祠」が生み出され、宗祠建築にも宗祠系、支祠系、家祠系、専祠系の四系統の類型化が生じ、両者の階層性について明らかにしている。

第五章では、宗祠遺構の平面形式、平面構成、構造形式を比較検討することで、宗祠建築の空間構成の特質を明らかにしている。

まず、平面形式は、庭と門、堂、寝を一つユニットとして縦一列に並べる進という空間単位を造り、一進型から五進型の構成を生み出し、小型の一進三間から大型の五進七間まで多様な平面形式を成立させ、宗祠系では三進五間、支祠系、家祠系では三進三間や二進三間を多く採用したことを指摘している。次に、平面構成は、門、堂、寝の主要建物の機能が共通し、門、堂、寝の正面・背面柱列では「減柱式」、「移柱式」などを用いて、各建物と中庭の間に連続性の強い空間を生み出したことを明らかにしている。さらに、構造形式は、門、堂、寝の身舎・庇からなる構造システム、柱間に虹梁・貫などの横架材を渡す架構形式を成立させた。宗祠系では抬梁式架構を基本とし、支祠系では抬梁式架構に穿閣式架構が混入し、家祠系では単純な穿閣式の構造が用いられたこと明らかにしている。

第六章では、各章で得られた研究成果と意義を総括して結論としている。

本研究は、中国建築史学において、従来の中国側における大規模で著名な建築のみ扱う視点と異なり、地域を限定して中小の遺構を含めた悉皆的調査に基づく新たな研究であり、その手法は地方志による「文献研究」と建築遺構による「遺構研究」により構成されており、史料の精緻な分析・検討を基に、対象地域の祠堂建築の歴史的な「形成過程」と建築遺構の「空間構成」を解明している。この研究成果は、日中両国の建築学のみならず歴史学、社会学、民俗学などの関連学会にも貢献し得るものと判断される。よって、本論文は博士論文として学術的な水準を満たすものと判定した。